



歴史資料ネットワークへの協力（自治体・NGOとの協力による歴史資料保全事業）

木村, 修二
森田, 竜雄
石川, 道子
人見, 佐知子

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 3(平成16年度事業報告書):74-77

(Issue Date)

2005-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002206>



歴史資料ネットワークへの協力

歴史資料ネットワークは、歴史学会とさまざまな市民からなるボランティア組織で、歴史資料の保全とその社会的活用を実践的に進めている。文学部地域連携センターは、その発足当初から現在まで、さまざまなかたちで連携し、その活動に協力してきた。

以下に、今年度センターが歴史資料ネットワークと協力して行った事業についてその内容を記録する。

1. 台風23号による被災資料調査・レスキュー活動への協力

2004年10月20日から21日にかけて日本列島を襲った台風23号は、10もの上陸台風をみた2004年の中でももっとも大規模で、かつもっとも大きな被害をもたらした。被害は、北海道を除く全国各地におよび、死者も全国で95人（2005年2月23日現在）にのぼる大惨事となった。ここでは、台風23号についての詳細を省かざるを得ないが、内閣府、国土交通省、気象庁など諸官庁のHPより台風被害の状況を詳しく知ることができるのでそちらを参照されたい。

これまで地震被害への対応を中心に活動を進めてきた歴史資料ネットワークでは、2004年7月の新潟・福島豪雨および同月の福井豪雨に伴う水害への対応をも活動の柱に組み込むようになった。その後の各上陸台風に伴う水害被害についても注意を向けていたが、上陸台風の最後となった23号が現在史料ネットが事務局を置く神戸大学から比較的近い兵庫県・京都府にもっとも甚大な被害をもたらしたこともあり、台風通過後これら府県への直接的対応を重点的に行った。

現地調査に当たっては、関係諸方の多大な協力を得ているが、兵庫県域については兵庫県公館県政資料館および兵庫県立歴史博物館、京都府域では京都府立総合資料館より文書所在情報の提供などを得た。また実際訪問した各自治体よりも教育委員会を中心に文献資料の所在情報を多く得ている。これらにより、事前に一定の目標を定めることができ、限られた時間内での現地調査がかなりスムーズに進んだ。

地域連携センターからは、研究員（木村・坂江・橋本・人見）がこれら調査に加わる形で積極的に協力を行った。

以下時系列にそって、史料ネットによる台風23号被災資料調査および資料レスキュー活動を記してゆきたいが、いずれ史料ネットから詳細な報告が出されるものと思うのでここでは概略にとどめておく（現地での修復活動は後述）。

2004年10月20～21日：台風23号通過

10月24日：豊岡市現地調査

10月28日：豊岡市現地調査

11月1日：日高町現地調査およびM家文書レスキュー

11月4日：西脇市・黒田庄町現地調査（協議含む）

11月6日：但東町現地調査（協議含む）

11月6日：洲本市現地調査

11月7日：日高町T家文書レスキュー

11月14日：養父市・和田山町・日高町現地調査

11月18日：出石町現地調査（協議含む）

11月19日：出石町H地区区有文書レスキュー

11月23日：日高町T家文書追加レスキュー

11月23日：養父市現地調査

12月1日：宮津市現地調査（協議含む）

12月8日：大江町現地調査（協議含む）

12月22日：舞鶴市現地調査（協議含む）

12月23日：加悦町現地調査（協議含む）

2005年1月5日：舞鶴市現地調査（協議含む）

1月6日：京丹後市現地調査（協議含む）

1月12日：舞鶴市現地調査

1月12日：宮津市現地調査（協議含む）

1月13日：福知山市現地調査（協議含む）

1月13日：大江町現地調査（協議含む）

1月24日：加悦町現地調査（協議含む）

1月31日：京丹後市現地調査

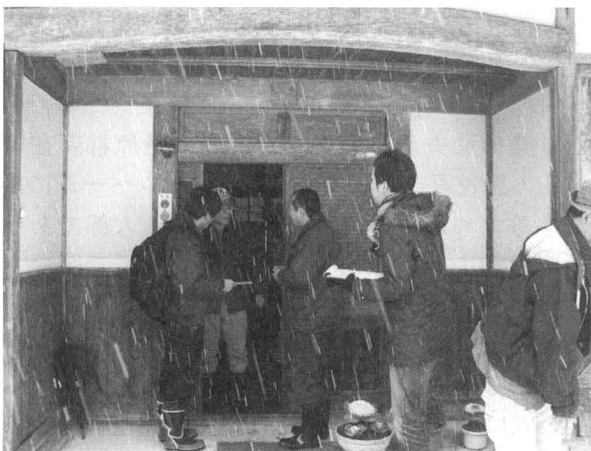
2月1日：福知山市現地調査

2月9日：京丹後市I家文書レスキュー

2月10日：野田川町現地調査（協議含む）

2月20日：舞鶴市M家文書レスキュー

見られるように、台風通過直後、まず対応したのは兵庫県域の但馬地域および丹波地域であった。一方京都府域の丹後・丹波地域への対応が本格化したのは台風通過後一ヶ月以上経過した2004年12月に入ってからである。なぜ兵庫県域が先になったかという理由はさまざまあるが、まずあまりに被害が広域にわたり兵庫・京都両府県全体に対応しきれず、やむなく神戸大学の所在する兵庫県に限定せざるをえなかったということが大きい。スタッフの数も限られ、また授業期間中ということもありもっとも頼りにすべき学生・院生を中心にしたボランティアの動員がかけにくかったことも少なからぬ影響があった。その後なんとか京都府域への対応も本格化し、現地への巡回調査も行えるようになったが、やはり手遅れ感が否めず、もう少し早く対応していればなんとか救えたかも知れない史料群の情報もあった。



ところで、上記活動の概略に見られるように、活動のある時期からは関係者による事前の協議の場が必ずと言っていいほど持たれるようになり、特に丹後地域での調査ではほぼそれが定着するに至っている。被災当初は被害対応に多忙を極める自治体との連携関係が構築できなかった場合もみられたが、但東町や出石町のように意義をご理解いただき多忙にもかかわらず積極的な協力をいただいた自治体もあった。

今後も現地調査は続けられる方針であるが、とくに兵庫県の但馬地域へは、これまでに実施されてきた調査が被災間もない頃のものであまり深く立ち入るような調査がなしえなかったこともあるが、改めて自治体との連携関係を構築するためにも再度調査が進められる予定である。

今回実施された現地調査では、一部を除いて地

元自治体の担当者（教育委員会・自治体史編纂担当者など）、地元研究者および研究団体（但馬史研究会、舞鶴地方史研究会、京丹後ふるさと歴史研究会等）、史料ネットを中心とする歴史研究者（大学関係者）の三者による連携関係のもと進められているのが特徴である。それは、史料ネットのような外部の存在が単独で現地へ入っても調査がスムーズに進まないことが予想されたため、現地の事情に詳しい自治体や個人レベルで顔が利くような地元研究者に協力を仰ぐべきことが当初から求められていたためである。実際やむを得ず史料ネットメンバーだけで現地した際に地元側より怪しまれてしまったケースもあった。しかし、それは地域連携センターがこれまでに進めてきた様々な事業のなかで、民（地元市民）・官（自治体）・学（神戸大学）による三者連携のスタイルを構築してきたのと全く軌を一にするものといえよう。このことは、あくまで外部の立場でしかない大学などの存在が地域社会を対象になんらかの事業を展開するうえで、民官学の三者による連携関係構築が必要かつ不可欠の条件であることを改めて証明する事実といえるのではないだろうか。

（文責・木村修二）



2. 台風23号被災水損史料の修復への協力

台風23号による被災からレスキューした史料は、①日高町M家から近代以降の文書約20点（2004/11/1）②日高町T家から近世・近現代の文書・書籍等約300点以上及びふすま6枚（2004/11/7, 23）③出石町H地区から公民館保管の近世・近現代の文書・絵図・写真（アルバム）・ファイル等段ボール箱11箱分（2004./11/19）④京丹後市I家からふすま約50枚（2005./2/9）⑤舞鶴市S家から持

ち回り保管中のM区有文書約40点（2005/2/10, 17, 20, 23, 3/5, 16, 21）⑥同市M家から文書4点（2005/2/20）となっている。このうち①は京都造形芸術大学歴史遺産研究センターの尾立和則氏に修復を依頼し、④は京丹後市ふるさと歴史研究会の富澤孝雄氏にカビ取りを依頼したが、この両者以外については、史料ネットが主体となって乾燥・修復活動を行い、地域連携センターもそれに協力した。



このうち、②③ および⑥は、神戸大学文学部に搬入し、処理を行った。とりわけ、劣悪な状態で大量の史料を救出した②③は、のべ200名を超える学生・市民ボランティアの協力も得ながらの作業となった。②については、水損の程度の軽微なものでは1点ずつキッチンペーパーを用いて吸水・乾燥作業を行ったあと陰干しし、水損・汚損の著しいものは、冷凍凍結して真空凍結乾燥処理に回すため、その準備作業（水洗い・吸水・消毒・整形・袋詰め等）を行った（2004/11/27, 28で終了）。また並行して仮目録の作成も行った。③については、被災から長時間が経過し、劣化が進行していることに鑑み、早急に全点冷凍凍結して凍結乾燥処理に回すことにし、準備作業を行った（2004/12/4, 5に終了）。そして2004年12月6日に両者の冷凍凍結分（段ボール箱39箱）を冷凍倉庫会社へ搬入した（その後前者については段ボール3箱分を追加）。これらについては、兵庫県教育委員会（文化財室・埋蔵文化財調査事務所）の協力を得て、真空凍結乾燥処理を行う機関の選定と依頼を行い、2005年3月、滋賀県立安土城考古博物館・兵庫県埋蔵文化財調査事務所・神戸市埋蔵文化財センターの3機関のご協力を得て乾燥処理を実施することとなった（安土城考古博物館への

水損史料搬入は3月24日に実施された）。ご協力いただいた各機関に感謝の意を表したい。以上の過程において、地域連携センターからは、各研究員がボランティアとして作業に参加・協力するとともに、森田が史料の管理と作業全体の取りまとめの補佐、および特に凍結乾燥作業を進めるにあたっての県教委・乾燥機関との連絡調整等を担当した。一方、⑥は、すでに所有者が天日干しにより乾燥させていたが、変形してしまったため、史料ネットがその修復の依頼をうけたもので、木村が修復作業に協力している。

また、⑤については、地域への水損史料の処置のノウハウの伝達の意味も含め、現地で地元の方の参加も得ながら、1点ごとの手作業による吸水・乾燥作業を行った。地域連携センターからは木村が作業に協力した。（文責・森田竜雄）

3. 神戸市文書館「柴田和夫氏所蔵文書」の調査 にともなうHP掲載記事の作成

神戸市文書館と歴史資料ネットワークで行った「柴田和夫氏所蔵文書」（元、兔原郡新在家村）の調査報告として文書館のホームページに掲載するための原稿の依頼があった。大部である「柴田和夫氏所蔵文書」は継続的な調査がなされ、すでに平成元年・同2年に古文書調査報告『神戸市文献史料』第九・第十巻として一部が翻刻されている。

今回は摂泉十二郷のうち上灘郷に属した同家の史料等によって灘酒造業を紹介するという趣旨である。しかし、依頼を受けたのが12月、原稿の提出が2月ということで、実際に史料を目にする時間もなく、すでに発刊されている『灘酒造経済史料集成』・『新修神戸市史』等の文献と、柴田家については『神戸市文献史料』第九・第十巻を参考に、近世の灘酒造業に触れた。史料はもちろん、写真や図版についても今後十分な検討が必要であり、更新が可能であることがありがたい。（文責・石川道子）

4. その他の協力活動

そのほかの史料ネットへの協力活動は以下のとおりである。①2004年9月5日開催の歴史資料ネットワーク第一回近世市民講座「芦屋の歴史をたどる～尼崎藩と灘目の村々」（於：芦屋市民センター、講演：岩城卓二氏「幕藩体制にお

ける尼崎藩の役割」、明尾圭造氏「三条村の水利事情」、展示解説「古地図と用水」）を後援した。②史料ネットが参加した2005年1月20日「国連防災世界会議」（於：神戸国際会議場）に、地域連携センターから奥村弘（事業責任者）が参加し、「文化遺産の自然災害史と被災した文化遺産の修復」をテーマとした分科会において、「動産文化財の防災対策と救出・修復」と題した報告を行った。①は、現在芦屋市立美術博物館が直面している指定管理者制度（公共施設の管理を会社法人、NPOなどの民間事業者代行させるもの。住民サービスの向

上や、住民のニーズに応えることを目的としているが、専門職員の恒常的・安定的雇用ができなくなることによる専門性が要求される面での機能の低下などが懸念されている）の導入問題に関し、同館が所蔵する多くの貴重な歴史資料の利用・活用のあり方を市民とともに考えるという趣旨で歴史資料ネットワークが行ったものである。これは、この間地域連携センターが議論を深めてきた地域社会と協力しつつ歴史遺産の利用・活用のあり方を考えるという問題と課題を共有するものであり、ゆえに当センターは後援として協力した。（文責・人見佐知子）